
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

割山遺跡（第5次）

1986. 3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

割山遺跡 (第5次)

1986. 3

深谷市教育委員会

序

割山遺跡の発掘調査が初めて実施されたのは、昭和37年11月のことでした。柳山敏司先生、小沢国平先生のもとで埴輪麻跡の調査が行われ、この地に、約1,400年前に埴輪製作に従事していた人々がいたことが明らかにされました。以来割山遺跡は、県内でも重要な遺跡として、昭和53年、56年、59年と4次にわたり発掘調査が実施され、貴重な成果を収めました。その過程で、約600年前の館跡の可能性がある遺構も発見されました。此の度、遺跡地内の住宅建設予定地の発掘調査を実施いたしました。第5次発掘調査ということになります。

私たちの郷土深谷市は、現在日に日に発掘を進めております。割山遺跡の近辺も住宅が急増しておりますが、現在のこうした私たちの文化・社会は、先人の足跡の上に成り立っているということを、遺跡の発掘調査を行うたびに実感いたします。

遺跡の発掘調査などの埋蔵文化財保護活動は、たとえれば、歴史という大河から一滴の水を掬うことにも値しないかもしれません。しかし、こうした地道な努力を重ねてこそ、歴史は私たちに、私たちの文化・社会の奥底にあるものを語りかけてくれると信じております。

おわりに、この発掘調査にあたり、快く御協力くださった土地所有者の酒井・知氏、関係者のみなさまや地元のみなさまに、深く感謝いたします。

昭和61年3月

深谷市教育委員会
教育長 烏塚 恵和男

例　　言

1. 本書は、個人住宅の建築に伴う、埼玉県深谷市上野台字割山2843番所在遺跡の発掘調査報告書である。事業名は割山遺跡第5次発掘調査とした。
2. 発掘調査は、昭和60年度事業として、国及び県の補助金の交付を受け、深谷市教育委員会が主体となり実施した。現地発掘期間は昭和60年10月1日～10月31日で、調査面積は約400m²である。
3. 本書の執筆・編集及び写真撮影は澤出晃越が行った。
4. 出土品の整理及び図版の作成等は、整理参加者全員で行った。なお、図版中の北は、座標北を示している。
5. 出土品は、深谷市教育委員会が保管している。
6. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御助言を賜わった。

井上肇、今井宏、小川望、小俣悟、栗原文蔵、坂東隊秀、水村孝行

発掘調査の組織

調査主体者 深谷市教育委員会 教育長 烏塚恵和男

教育次長 堀 輝雄

事務局 深谷市教育委員会社会教育課 課長 飯島光武

課長補佐兼文化財保護係長

河田紀久平

主事 村田正義、小林京子

調査担当者 深谷市教育委員会社会教育課 主事 澤出晃越

調査補助員 田中秀逸（埼玉大学生）

調査参加者 加藤佳子、河合紗子、久米紀子、小沼和子、里山まり子、砂田伊久子、都築百合子、細川ケイ子、水野祥代、本橋玲子、森光代、湯沢直子、渡辺哲子。

目 次

序

例言

目次

I . 発掘調査に至る経過.....	1
II . 遺跡の地理的歴史的環境.....	1
III . 調査の概要	3
IV . 遺構と出土遺物.....	
1 . 縄文土器.....	9
2 . 古墳時代の遺構と出土遺物.....	10
3 . 近世の遺構と出土遺物.....	30
V . まとめにかえて.....	32

写真図版

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡位図 (1/40,000)
第2図 調査区周辺地形図 (1/10,000)
第3図 調査区全測図 (1/160)
第4図 土層断面図 (1)
第5図 土層断面図 (2)
第6図 土層断面図 (3)
第7図 土層断面図 (4)
第8図 縄文土器拓影図
第9図 古墳時代の出土遺物・土塚 (1)
第10図 古墳時代の出土遺物・土塚 (2)
第11図 古墳時代の出土遺物・土塚 (3)

- 第12図 古墳時代の出土遺物・溝状遺構 (1)
第13図 古墳時代の出土遺物・溝状遺構 (2)
第14図 古墳時代の出土遺物・溝状遺構 (3)
第15図 古墳時代の山上遺物・溝状遺構 (4)
第16図 第1号竪穴遺構出土遺物
第17図 第1号竪穴遺構出土遺物 (1)
第18図 第1号竪穴遺構出土遺物 (2)
第19図 第1号竪穴遺構出土遺物 (3)
第20図 第1号竪穴遺構出土遺物 (1)
第21図 表面採集の古墳時代遺物
第22図 近世の出土遺物

I. 発掘調査に至る経過

埼玉県北部に位置し、利根川を隔てて群馬県と接する深谷市は、近代日本経済界の偉人、渋沢栄一の生地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは康正2年（1456）に上杉房恵が築いたといわれる深谷城の城下町として、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約89,000人、面積約70km²で、農業生産高は県内随一を誇り、工業団地の形成、住宅の増加など、急速に都市化が進行している。

昭和37年10月、深谷市上野台字割山で、県立深谷商業高等学校地盤部が円筒埴輪を発見した。このことにより、その年の11月21日～24日に、上野台字割山2843番において、埴輪窯跡の発掘調査が実施された（註1）。昭和53年9月12日～11月30日には、都市計画街路南大通り線の建設に伴い、約3,000m²の発掘調査が実施された。この調査では、浅い埋没谷を挟んで東側に埴輪窯跡と粘土採掘跡などが、西側に中世の溝状遺構などが確認された（註2）。この時には、調査区を横断する生活道路部分の調査ができなかったが、この部分の調査は、昭和56年2月12日～3月5日に実施された（註3）。なお、都市計画街路南大通り線の延長に伴い、昭和56年6月16日～10月15日には、割山遺跡に西接する鼠裏遺跡の発掘調査が実施された（註4）。

さて、割山遺跡のある上野台地区は、深谷駅に近い台地上であり、深谷市でも特に住宅の増加が著しい地区である。昭和58年11月、割山遺跡内の上野台2941番1号に、住宅が建設されることが明らかになり、59年12月5日～12月25日に発掘調査を実施した（註5）。この現地発掘中に、やはり遺跡内の2843番にも住宅が建設される予定であることがわかった。そこで市教育委員会は、土地所有者の酒井一知氏と協議し、昭和60年10月に発掘調査を行うことになった。

調査の名称は、上記の経過から、割山遺跡第5次発掘調査とした。

註1 小沢国平 「割山埴輪窯跡」 昭和39年3月 深谷市教育委員会

註2 今泉泰之・大和修ほか 「割山遺跡」 昭和56年3月 深谷市割山遺跡調査会

註3 今泉泰之ほか 「割山遺跡（第3次）」 昭和57年2月 深谷市教育委員会

註4 澤出晃越 「鼠裏遺跡」 昭和58年3月 深谷市教育委員会

註5 澤出晃越 「割山遺跡（第4次）」 昭和60年3月 深谷市教育委員会

II. 遺跡の地理的・歴史的環境

深谷市の地形を概観すると、ほぼ東西を走る国鉄高崎線付近を境界として、南半を占める櫛挽台地と、北半を占める妻沼低地に三分される。櫛挽台地は、荒川の作用により形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる洪積扇状台地であり、妻沼低地は、利根川の作用により形成された沖積低地である。

櫛挽台地は、西側の武藏野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東側の立川面に比定される寄



1. 割山遺跡 2. 内ヶ島氏館跡 3. 上敷免遺跡 4. 皿沼城跡 5. 伝幡羅太郎館跡
6. 東方城跡 7. 木の本古墳群 8. 庁鼻和城跡 9. 深谷城跡 10. 深谷町遺跡
11. 大沼彈正忠屋敷跡 12. 桜田馬場 13. 曲田城跡 14. 桜ヶ丘糸石遺跡 15. 秋元氏
館跡 16. 小台遺跡 17. 落場松原遺跡 18. 鼠裏遺跡 19. 出口遺跡 20. 島之上遺
跡 21. 前出遺跡 22. 人見館跡

第1図 遺跡位置図 (1/40,000)

居面（御陵ケ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面は、ほぼ高崎線沿いの崖線で、比高5~20mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は、高崎線より1.5~1.8kmほど延びており比高2~5mをもって妻沼低地と接している。台地と低地の境界付近の標高は、櫛挽面が40~50m、寄居面が32~35m、妻沼低地が30~35mである。なお、櫛挽面の北東端近くに第三紀層から成る残丘である仙元山（標高98.0m）があり、台地北端部の櫛挽面と寄居面の境界付近には、活断層である深谷断層が確認されている。

割山遺跡は、深谷市上野台字剣山、国鉄高崎線深谷駅の南約0.8kmにある。櫛挽台地櫛挽面の北端部にあたり、標高は約56mである。櫛挽面上の遺跡は、上唐沢川・押切川・戸田川・唐沢川などにより南北に開析された谷筋に数多く分布している。古墳時代後期以降の遺跡も決して少なくはないが、縄文時代中期後半～後期初頭の遺跡が多いことが目立つ。こうした状況は、いわゆる扇端溝水と深く関わっているものと考えられる（註1）。

妻沼低地内に自然堤防上には、古墳時代後期以降の遺跡が密集している。これは、稻作を中心とした当時の生産様式に関わるものと理解できる。櫛挽台地寄居面北端部、妻沼低地を見おろす台地上には木の本古墳群があり、現在は小円墳10数基が残っている。

なお、割山遺跡の西側には、13世紀末～14世紀初頭頃に構築されたと推定される溝状遺構（館の掘跡とも考えられる）が確認されており、その西の鼠糞遺跡では、15世紀末～16世紀頃の墓塚群などが確認されている。

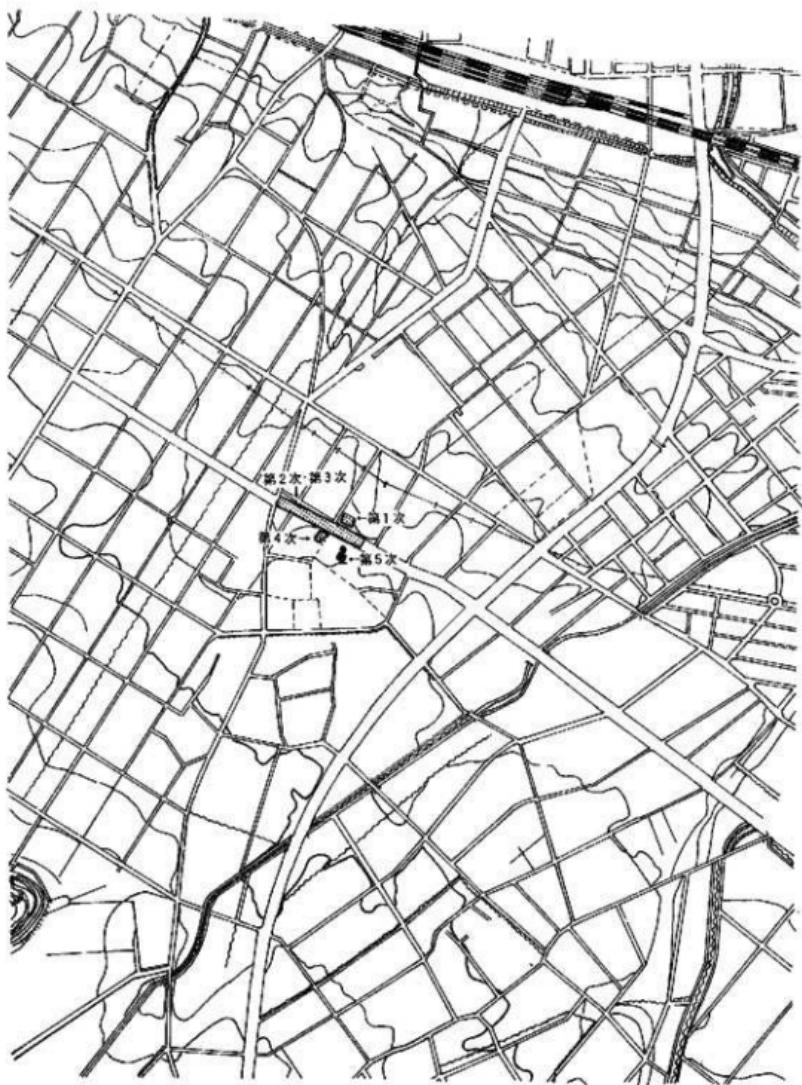
註1 植沼幹夫「II. 立地と環境」埼玉県遺跡発掘調査報告第12集「前島・鳥之上・出口・芝山」所収 昭和52年3月 埼玉県教育委員会

III. 調査の概要

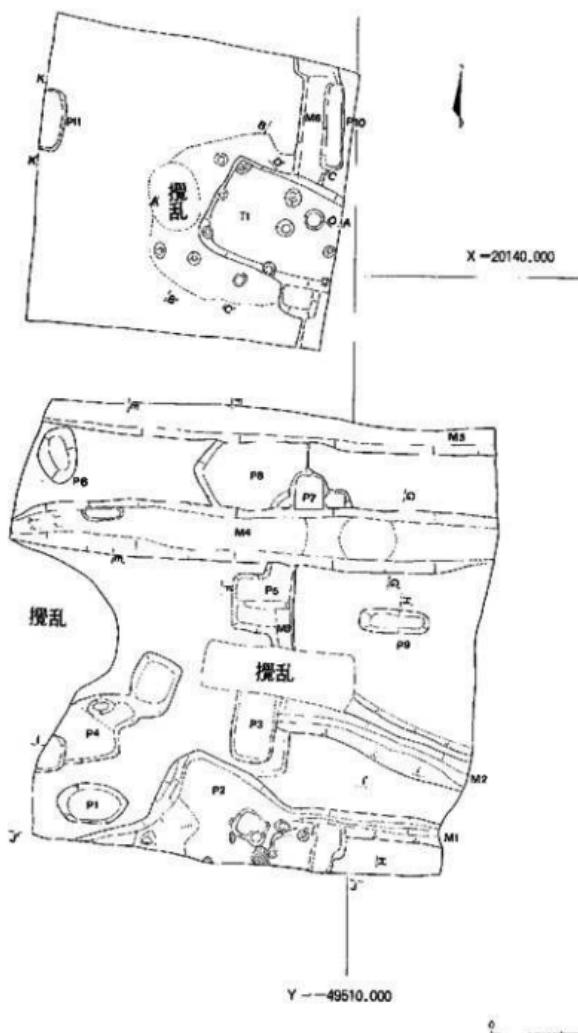
昭和60年10月1日、パワーショベルによる表土の除去から調査を開始した。昭和53年度の第2次発掘調査の際に設定した遺跡原点を利用して基準杭を設定し、特にグリッドは設定しなかった。なお、パワーショベルによる表土の除去は、排土置場の処理等のため、更に10月14日、23日と3回にわたって行った。

調査区は、排土置き場等の事情により、南側と北側に二分された。南側の調査区から調査を開始した。攪乱が激しく、遺構を確認するのは困難であったが、土塙・溝状遺構などを調査し、10月22日に調査区南側の調査を終えた。10月23日に排土を移し、北側の調査区の調査を開始し、竪穴遺構、土塙を検出した。竪穴遺構は、確認面では住居跡かとも思われたが、調査を進めるうちに、埴輪製作工房的な性格の遺構であることが確認された。10月31日、調査区北側の全景写真を撮影し、現地調査を終了した。

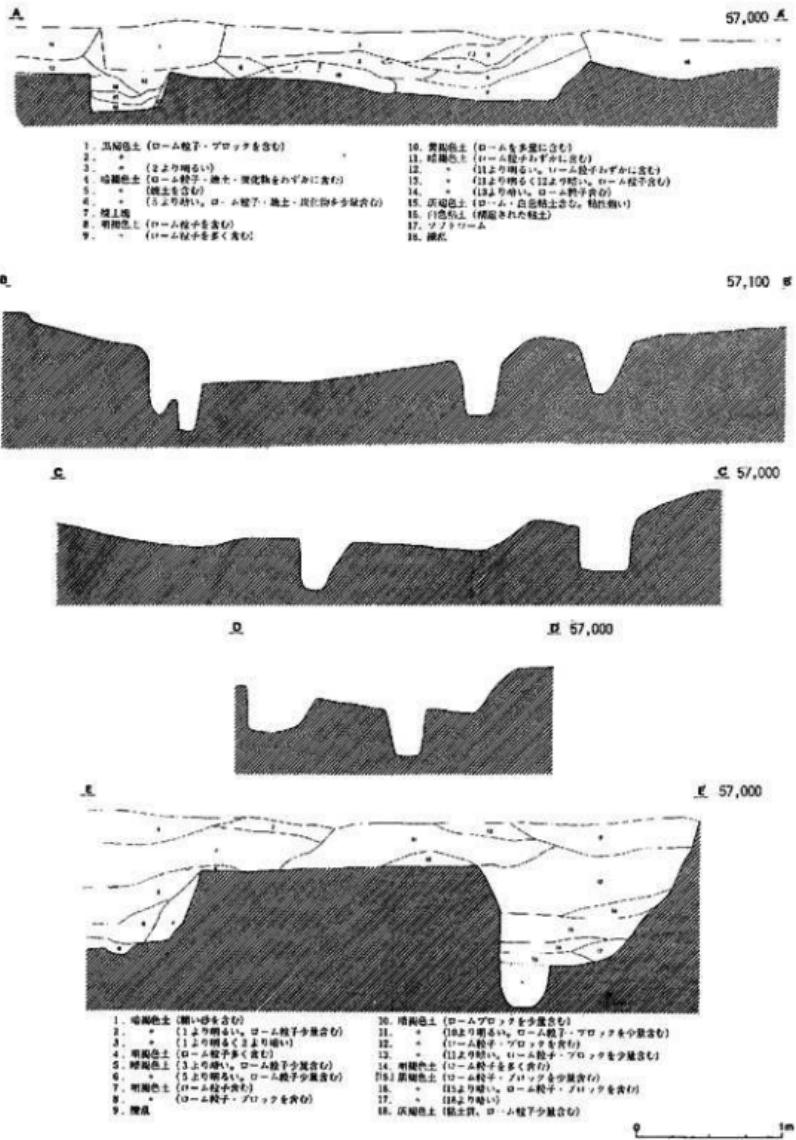
検出された遺構は、竪穴遺構・土塙・溝状遺構などである。竪穴遺構1基のみが古墳時代の遺構で、他は近世の遺構と考えられる。出土遺物は、土師器・埴輪・土馬の顔面・近世の焰硝・陶器などであるが、繩文土器片も少數はあるが出土した。



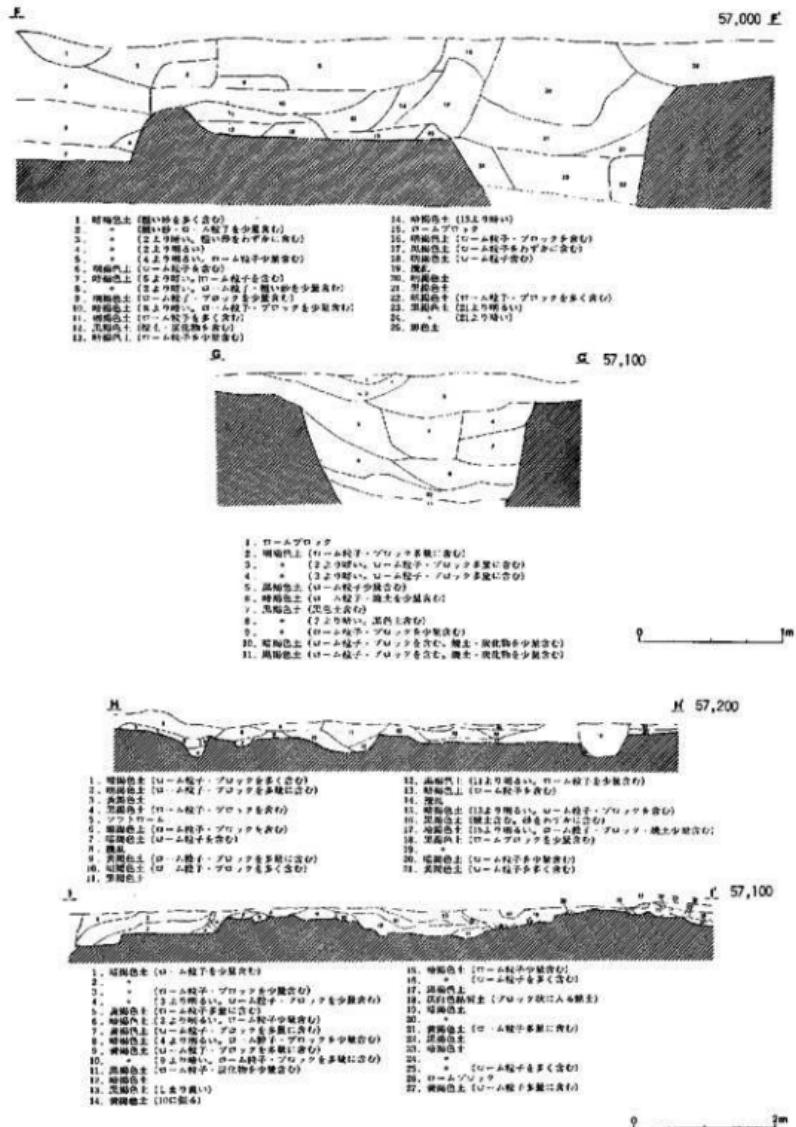
第2図 調査区周辺地形図 (1/10,000)



第4図 調査区全測図 (1/160)



第4図 土壌断面(1)

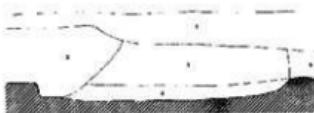


第5図 土層断面図 (2)



1. 黄褐色土 (腐土)
2. " " (ローム粒子・ブロックを少里。炭化物を含む)
3. 明褐色土 (ローム粒子を多く含む)
4. 褐褐色土 (ローム粒子を多量に含む)
5. 灰褐色土 (ローム粒子・ブロックを含む。炭化物を少量含む)
6. " " (土より暗い。ローム粒子を少量含む)
7. " " (土より暗い。ローム粒子を少量含む)
8. " " (ローム粒子を含む)
9. 黄褐色土 (ローム粒子・腐葉土を少量含む)
10. 黑褐色土 (ローム粒子・ブロックを少量含む)
11. "
12. 灰褐色土 (ローム粒子・炭化物を少量含む)
13. 相模色土 (ローム粒子・自己結土・炭化物を少量含む)
14. " " (ローム粒子を含む。炭化物を含む)
15. 深褐色土 (ローム粒子を少量含む)
16. 黑褐色土 (ローム粒子・自然粘土を含む。炭化物・根を少量含む)
17. 灰褐色土 (ローム粒子を少量含む)
18. 灰褐色土 (ローム粒子・泥炭土を少量含む)
19. 明褐色土 (白色熟土を多く含む)
20. " " (土より淡い。白色熟土を含む)
21. 黑褐色土 (ローム粒子・自己結土を含む。炭化物少量含む)
22. 灰褐色土 (ローム粒子・ブロックを多く含む。熟土・炭化物少量含む)
23. 明褐色土 (ローム粒子・ブロックを多量に含む)
24. 出現褐色土 (ローム粒子・ブリッカを含む)
25. ロームアリック
26. " " (ローム粒子・ブロックを含む。炭化物を少量含む)
27. 明褐色土 (ローム粒子・ブロックを多量に含む)
28. 灰褐色土 (ローム粒子を少量含む)
29. " " (土より明るい。ローム粒子・ブロックを少量含む)
30. " " (土より暗い。ローム粒子・ブロックを含む)
31. 黑褐色土 (ローム粒子・自己結土・ブリッカを少量含む)
32. " " (土より暗い。ローム粒子・ブリッカを含む)
33. 明褐色土 (ローム粒子を多く含む)
34. 灰褐色土 (土より暗い。ローム粒子を少量含む)

JC 57,500



1. 黄褐色土 (腐土)
2. 残灰
3. 黑褐色土 (ローム粒子を少量含む)
4. " " (土より暗い。ローム粒子含む)
5. 灰褐色土

0 3m

第6図 土層断面図（3）

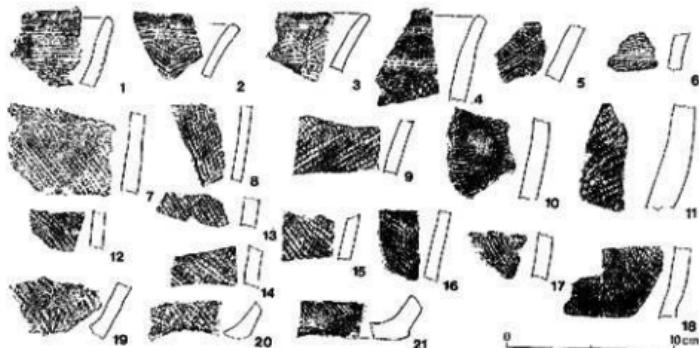
IV. 遺構と出土遺物

1. 繩文土器 (第8図1~21)

この調査では、縄文時代の遺構は検出されなかったが、各遺構などから縄文土器の小破片が出土した。諸磯a式を主体とする前期のものがほとんどであると考えられるが、11のみ中期加曾利E式である。

1~6は、半截竹管による文様が描かれており、3・5は縄文を地文としている。4は連続爪形文。7は結束がある。19~21は、底部又は底部に近い破片。21の底面はよく磨かれている。1~10及び12~21は、胎土精選され、内面もよく磨かれている。縄文は、9がL.R単節横転、11がR.L単節縱転、19がR.L.R複節横転、その他は、確認できない1・2・6を除きR.L単節横転であろう。焼成は、1・3・6・9・11・12・14・15・17・21が良、20がやや不良、その他は良好。

3・17・21は第2号土塙出土。4・6・14・15は第8号土塙出土。5は第1号溝状遺構出土。1・20は第3号溝状遺構出土。2・16・18は第4号溝状遺構出土。19は第5号溝状遺構出土。その他は表面採集。



第7図 縄文土器拓影図

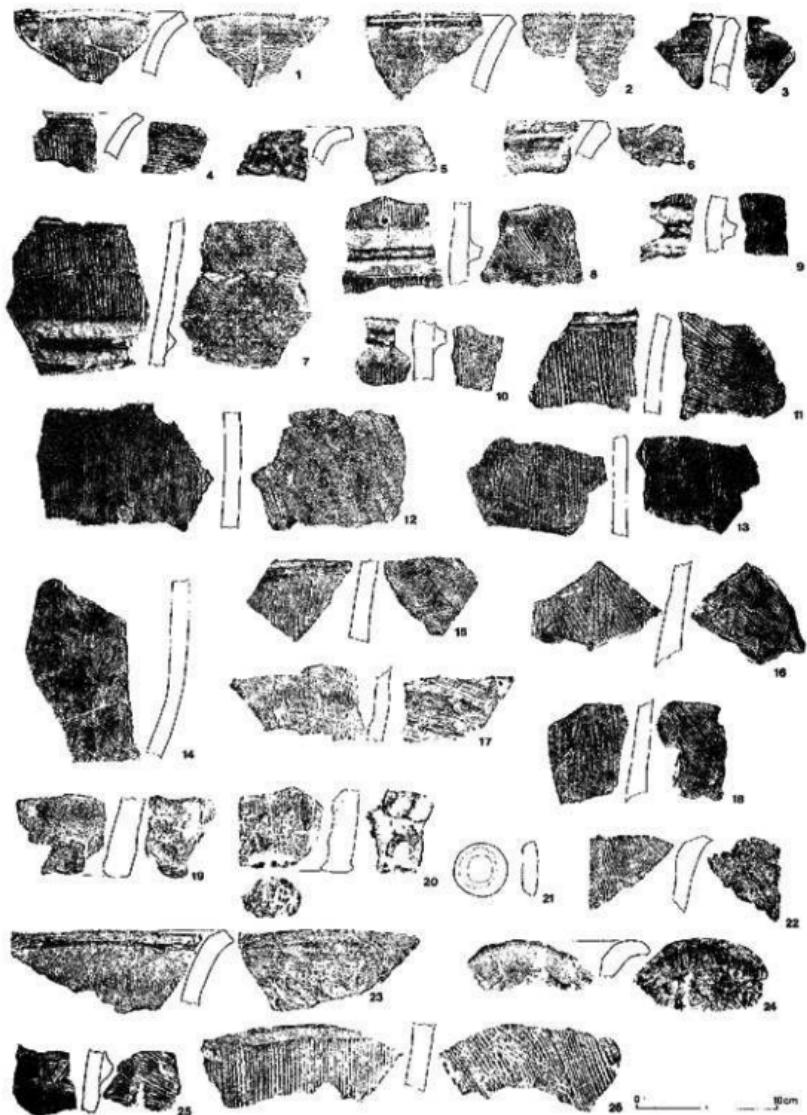
2. 古墳時代の遺構と出土遺物

古墳時代の遺構は、第1号竪穴遺構のみであり、他の出土遺物は、いずれも流入したものと考えられる。

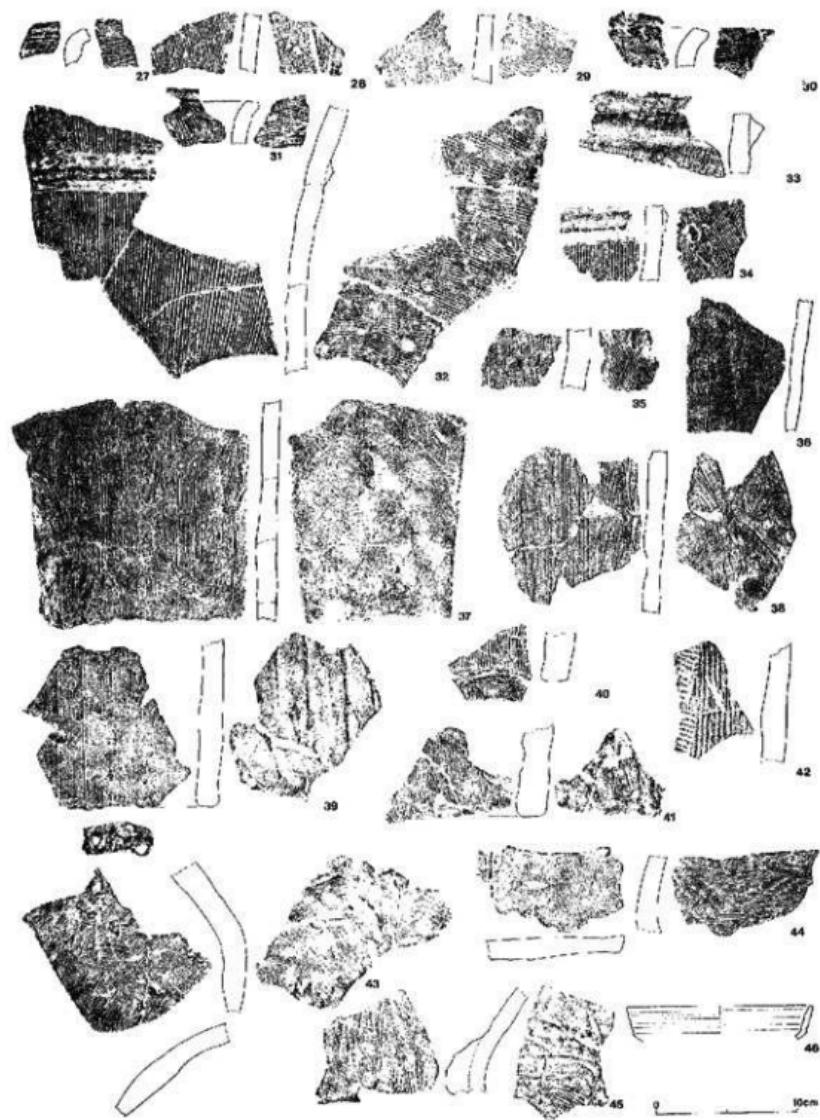
(1). 土塙出土遺物 (第9図1～第11図56)

○埴輪 (第9図1～第10図45・第11図47～55)

番号	焼成	色調	ハケ目 (1cm)	出土遺構など	番号	焼成	色調	ハケ目 (1cm)	出土遺構など
1	良好	淡橙褐色	5本	P 2	26	良好	橙褐色	4～5本	P 5 形象？
2	良	橙色	8本	タ	27	良好	橙褐色	6～7本	P 5
3	良好	暗橙褐色	7本	タ	28	良	淡橙褐色	6本	タ
4	良好	暗褐色	4～5本	タ	29	良	橙褐色	6～7本	タ
5	良	淡橙色	6～7本	タ	30	良	淡橙褐色	6本	P 7
6	良	淡橙褐色	5～6本	タ	31	良好	淡橙褐色	5～6本	P 8
7	良	暗橙褐色	4本	タ 外面左端に凹形の透孔	32	良	淡橙褐色	5～6本	上端に透孔あり
8	良好	淡橙褐色	5～6本	P 2 上端透孔	33	良	淡褐色	5本	P 8 内面観の指ナデ。
9	良好	暗褐色	6～7本	タ 内面炭化物付着	34	良	淡褐色	5～6本	P 8
10	良好	淡橙褐色	6本	P 2 内面炭化物付着	35	良	淡褐色	6本	タ 内面指の押圧とナデ。
11	良好	黃白色	4本	P 2	36	良	淡橙褐色	9本	P 8
12	良好	橙褐色	7本	タ	37	良	淡橙褐色	6本	タ 内面指ナデ。
13	良	淡橙褐色	8～9本	タ	38	良	淡橙褐色	6～7本	P 8
14	良	橙褐色	8本	タ 内面指ナデ	39	良	淡褐色	9～10本	タ 内面指ナデ
15	良好	淡橙褐色	7～8本	P 2	40	良好	淡橙褐色	6本	タ 内面指ナデ
16	良好	淡赤褐色	7本	タ	41	良	橙褐色	6本	P 8
17	良	淡褐色	7本	タ	42	良	淡褐色	3本	タ 内面指ナデ
18	良好	橙褐色	7～8本	タ	43	良	淡橙褐色	6～8本	P 8 形象埴輪
19	良	灰褐色	6～8本	タ 半須恵質	44	良好	淡橙褐色	6～8本	タ 形象埴輪
20	良	淡橙褐色	6～7本	タ 下記参照	45	良	淡橙褐色	4～5本	右端に透孔
21	良好	橙色	—	タ ボタン状の形態、上下面とも剥離面	46	良好	淡橙褐色	4～5本	P 8 形象埴輪
22	良	橙色	6～7本	P 2 形象埴輪	47	良好	淡橙褐色	4～5本	タ 透孔の一部残存
23	良好	灰色	7～8本	P 4・P 5、須恵質	48	良	橙褐色	6～8本	P 8 馬形埴輪
24	良	淡橙褐色	9本	P 4 形象埴輪	49	良好	橙褐色	8本	タ 馬形埴輪
25	良	橙褐色	5本	タ	50	良好	橙褐色	7～8本	タ 馬形埴輪
					51	良	橙褐色	6～7本	タ 馬形埴輪
					52	良好	橙褐色	8～9本	タ 馬形埴輪



第8図 古墳時代の出土遺物・土塙(1)



第9図 古墳時代の出土遺物・土塙（2）



第10図 古墳時代の出土遺物・土塙（3）

番号	焼成	色調	ハケ目 (1cm)	出土遺構など	番号	焼成	色調	ハケ目 (1cm)	出土遺構など
53	良好	淡橙褐色	8本	P 8 形象埴輪 内面指の押圧	54	良	淡褐色	4本	P 9

1～22は、第2号土塙出土。1～6は円筒埴輪の口縁部と思われるが、3は形象埴輪の可能性もある。7～10は突帯がある破片であり、11・12・15は突帯の下の指ナデと思われる部分が認められる。19・20は底部の破片。20は、内面に粘土を足して指の押圧により調整したことが明瞭で、底面はヘラ状工具により沈線が乱雑に刻まれている。21は形象埴輪に貼り付けたものであろう。22は、上位がかなりすぼまっており、拳手をした人物埴輪の脇の下と考えられる。

23は、第4号土塙と第5号土塙より出土した破片が接合した、円筒埴輪の口縁部。

24・25は、第4号土塙出土。24は形象埴輪の一部と考えられ、端部の径は小さい。

26～29は、第5号土塙出土。26は形象埴輪の一部と考えられ、突帯の下の指ナデが認められるとともに、外面の右端も縦に指ナデで調整されている。27は円筒埴輪の口縁部であろう。

30は、第7号土塙出土。円筒埴輪の口縁部である。

31～53は、第8号土塙出土。31は円筒埴輪の口縁部。32～34は突帯のあるもの。39～41は底部の破片。39の底面は、指の押圧とヘラ状工具で調整されている。40・41の底面は丁寧にナデされている。47は円筒埴輪で、推定口径25.5cm。43～45・48～52は形象埴輪の一部であろう。43・44はねじれた形態を呈する破片。45は内面に粘土が厚く貼り付けられている。48～51は馬形埴輪の脚である。48は付け根に近い部位と思われ、図の下位の推定径は9cm。49の推定底径は8cm弱で、底面は指の押圧の後、平坦にナデされている。50の推定底径は8.5cm弱で、底面にもハケ目が認められる。51は脚部中位と考えられ、図の中位での推定径は10cm。52は馬形埴輪の頭部に近い部分であろう。たてがみと思われる部分は剥離している。ハケ目調整のうえに突帯を施し、その上に鉢止め状の飾りがある。53は人物埴輪のであろうか。円錐状のものに、周囲の部分を絞り込むように貼り付け、頂部は突出している。

54は、第9号土塙出土。突帯のある破片である。

55は、第11号土塙出土。形象埴輪片と思われる。

○土師器（第10図46・第11図56）

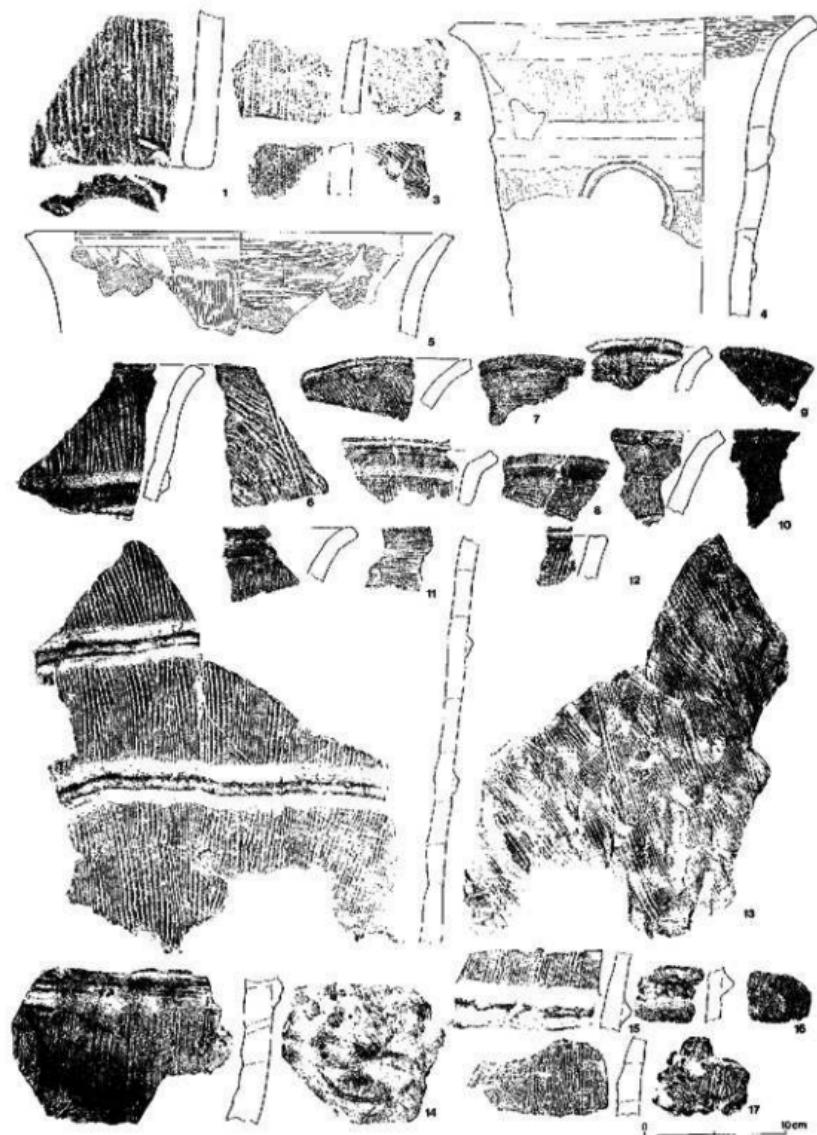
46の土師器环は、第8号土塙出土。推定口徑13cm強、残存高2.4cm。口縁部外面中位に沈線が2条巡る。口縁部と体部の境の稜は明瞭。焼成良好、黒褐色を呈する。

56の土師器环は、第6号土塙と第9号土塙から出土した破片が接合したもの。推定口径13cm、器高4.6cm。口縁部は少し外反し、口唇部上面は平坦で細い沈線が巡る。口縁部と体部の境の稜は、細い沈線を1条又は2条施すことにより作り出されている。体部内面は中央が少し窪む。体部外面へラ削り。焼成良好、橙褐色を呈する。

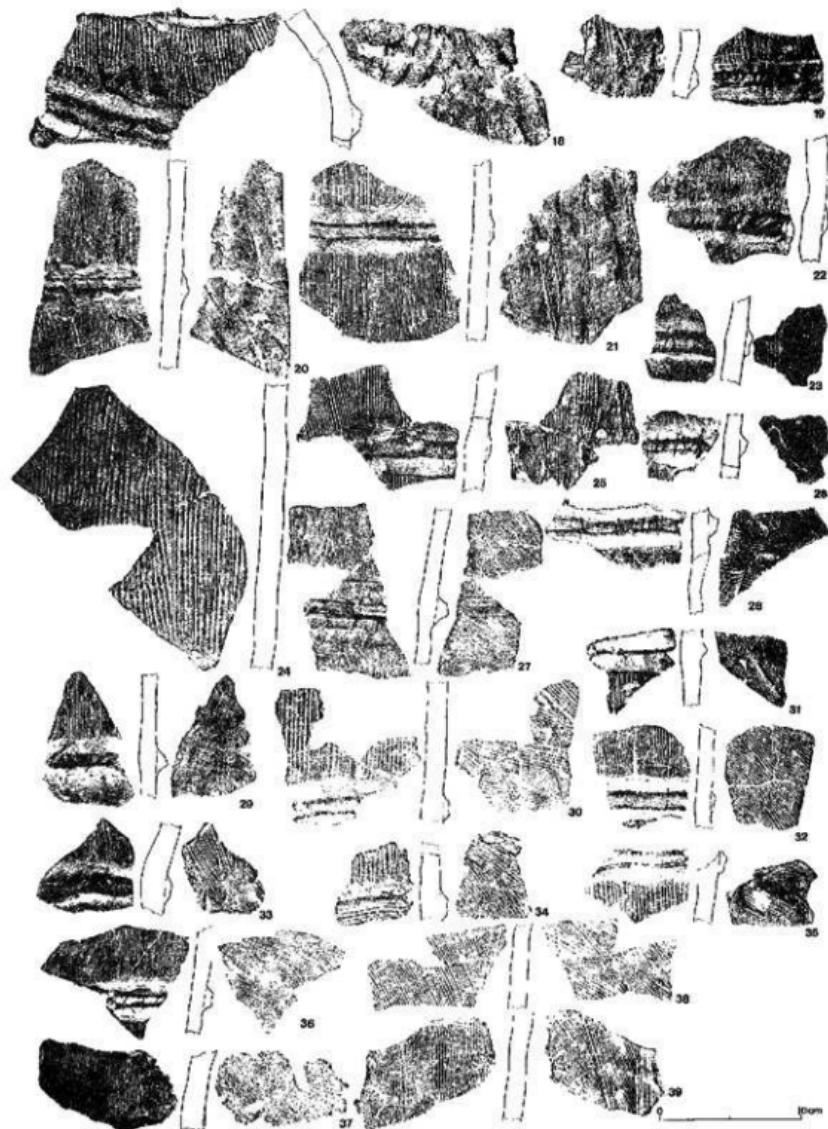
(2). 溝状遺構の出土遺物 (第12図1～第15図68)

○埴輪 (第12図1～第15図57・61～67)

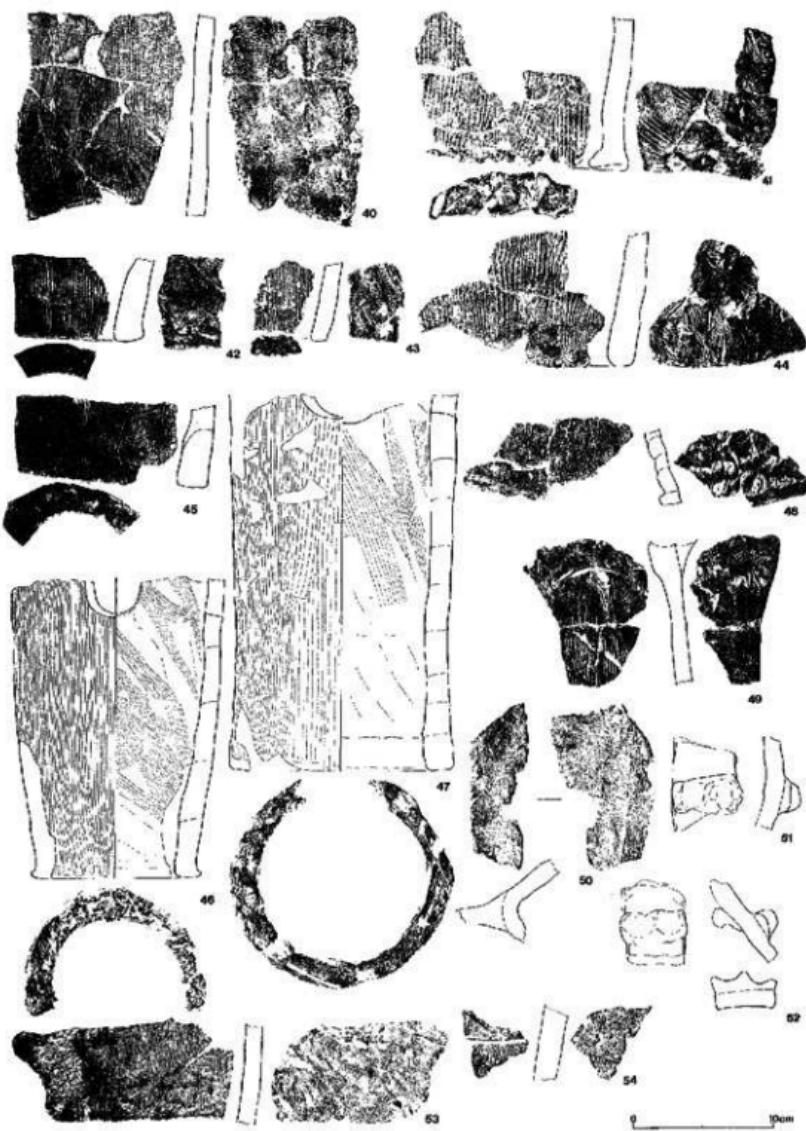
番号	焼成	色調	ハケ目 (1 cm)	出土遺構など	番号	焼成	色調	ハケ目 (1 cm)	出土遺構など
1	良	淡橙色	2～3本	M 2 内面ナデ	31	良好	暗橙褐色	9本	M 4
2	良	暗橙褐色	4本	タ	32	良	淡褐色	5～6本	タ
3	良	淡橙色	4～5本	M 3	33	良	淡褐色	6本	タ
4	良	淡褐色	5～6本	M 4	34	良好	橙褐色	4本	タ
5	良好	暗褐色	5本	タ	35	良好	橙褐色	4～5本	タ
6	良	黄白色	3～4本	タ	36	良好	赤褐色	9本	タ
7	良	淡橙褐色	外面5本	タ	37	良	赤褐色	6～7本	タ
			内面7本		38	良好	暗橙褐色	5～6本	タ
8	良好	暗褐色	5本	タ	39	良	淡褐色	6本	タ
9	良	淡褐色	4本	タ	40	良好	暗褐色	7本	タ
10	良	淡褐色	8本	タ	41	良	淡褐色	4本	タ
11	良好	黄白色	7～8本	タ	42	良好	赤褐色	5～6本	タ
12	良	淡棕褐色	4本	タ 内面指ナデ	43	良	淡褐色	6本	タ
13	良好	灰褐色	3～4本	タ 半須恵質	44	良	淡褐色	4本	タ
			5～6本		45	良	淡褐色	6本	タ
14	良	淡橙褐色	5本	タ	46	良	淡褐色	6～7本	タ 形象？
15	良	淡橙褐色	5本	タ 内面指ナデ	47	良好	淡橙褐色	3～4本	タ 形象？
16	良	暗褐色	6本	タ	48	良	淡褐色	6～7本	タ 形象埴輪
17	良好	赤褐色	5～6本	タ	49	良	淡褐色	5～6本	タ 形象埴輪
18	良	淡褐色	4～5本	タ 朝顔形	50	良	橙褐色	8本	タ 脚形埴輪？
				内面指ナデ	51	良	淡橙褐色		タ 大刀形埴輪
19	良	淡橙褐色	4本	M 4	52	良	黄白色		タ 51と同一
20	良好	淡褐色	6～7本	タ	53	良	暗褐色	7～8本	タ 形象埴輪
21	良好	淡褐色	7本	タ	54	良好	赤褐色	6～7本	タ 形象埴輪
22	良	淡褐色	6本	タ 内面指ナデ	55	良	淡褐色	3本	タ 形象埴輪
23	良	淡褐色～灰色	7～8本	タ 部分的 半須恵質	56	良好	橙褐色	6～7本	タ 形象埴輪
24	良	黄白色	3本	タ 内面指ナデ	57	良好	赤褐色	4本	タ 人物埴輪
25	良	淡褐色	5～6本	タ	61	良好	淡褐色	4～5本	M 5 形象埴輪
26	良好	淡褐色	7本	タ	62	良	淡橙褐色	6～7本	タ
27	良好	赤褐色	8本	タ	63	良	淡橙褐色	7～8本	タ
28	良好	淡褐色	4本	タ 内面に炭 化物付着	64	良好	淡橙褐色	6～7本	タ 脚形埴輪？
29	良好	橙褐色	8本	M 4	65	良	淡橙褐色	6本	M 6
30	良好	暗橙褐色	4本	タ	66	良好	橙褐色	7本	タ
					67	良好	赤褐色	7～8本	タ



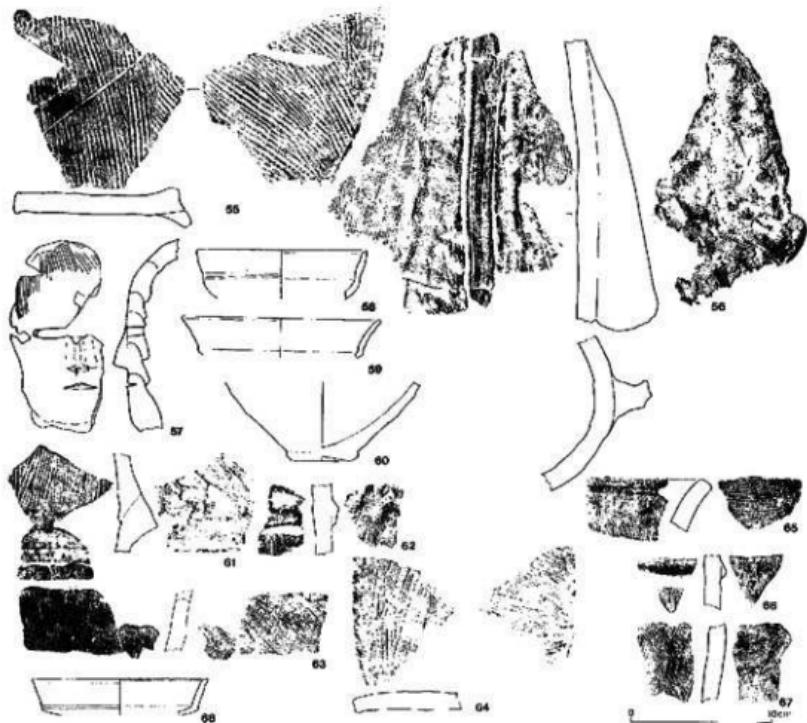
第11図 古墳時代の出土遺物・溝状造構（1）



第12図 占墳時代の出土遺物・溝状遺構（2）



第13図 古墳時代の出土遺物・溝状造構（3）



第14図 古墳時代の出土遺物・溝状遺構(4)

1・2は、第2号溝状遺構出土。1は円筒埴輪の底部の破片。底部は、底円周に対して斜めに順次粘土を貼り合わせるようにして成形されている。

3は、第3号溝状遺構出土。

4~57は、第4号溝状遺構出土。4の円筒埴輪は、推定口径25.5cm、残存高21.2cm。全体にやや歪んだ形態を呈し、円形の透孔は反時計回りに切り取られている。内面は口縁部を除き指の押圧とナデ。5~11は円筒埴輪の口縁部。5は、推定口径30cm、残存高7.4cm。12の口縁部は、直線的に外傾し、口唇部上面に沈線が巡る。13~23・25~36は、突帯のある破片。13は、中位の推定径17.5cm。透孔が中段に2ヶ所認められる。櫛状工具は1cmあたり3~4本のものと5~6本のもの2種類使用されているようである。輪穂痕明瞭。14は、内面の輪穂痕が明瞭で、指紋も認められる。18は、朝顔形円筒埴輪の肩部と思われる。突帯の下の左端に透孔がある。21の内面は、ハケ目調整の後指ナデ。25は、突帯の上に円形の透孔がある。26は、突帯の下に円形の透孔がある。27は、突帯の下の左端に突帯のごく一部がある。30は、右端に透孔がある。31の断面三角形の突帯は、微隆線

状につまみ出されている。33は、右上に透孔がある。34は、上部に円形の透孔がある。39は、左端に円形の透孔がある。41~45は、円筒埴輪の底部と思われる。41の底面は、強い指の押圧で調整されている。42の内面は、ハケ目調整の後指ナデ。底面はほとんどナデられておらず、ヘラ状工具による刻線がある。43の底面は、丁寧にナデられて平坦になっている。44の内面もハケ目調整の後指ナデ。底面もナデられている。45の底面は粗い指ナデ。46~57は、形象埴輪であろう。46は大刀形埴輪などの底部ではなからうか。上部の透孔は時計回りに切り取られている。内面はハケ目調整の後指ナデ。底面はあまり調整されていない。47は、肧又は舟形埴輪などの底部であろう。残存部分はほとんど全周している。上部に、対面に透孔が2つある。内面は輪廻痕が明瞭で、ハケ目調整の後粗い指ナデ。底面は指の押圧及びナデ。49は、径が小さく、内面は輪廻痕が明瞭で、指の押圧により調整されているが、凹凸が激しい。50は、輶形埴輪の右縁と思われ、正面には沈線がある。51~52は同一個体と考えられる大刀形埴輪の柄頭の一部であろう。飾りは三輪玉がかなり変形して崩れたものと思われる。53は、輶の側面と、下位に突帯の側面がある。54は、ハケ目の上に沈線が施されている。55は、輶形埴輪の左縁であろう。ハケ目の上に沈線が施されている。56は、輶形埴輪の右の下縁と思われる。57は、人物埴輪の顎部。丁寧な指の押圧とナデにより、整った顔立ちを呈する。

61~64は第5号溝状遺構出土。1は、形象埴輪片であろう。内面は指ナデ、底面も丁寧にナデされている。64は輶形埴輪の縁であろう。ハケ目の上に沈線が施されている。

65~67は、第6号溝状遺構出土。

○土師器（第15図58~60・68）

58~60は、第4号溝状遺構出土。

58の土師器環は、推定口径12cm。残存高3.0cm。口唇部内面が平坦にナデられており、口縁部と体部の境の後は、丸く不明瞭である。焼成良好、橙褐色を呈する。

59の土師器環は、推定口径14cm。残存高2.8cm。口縁部は外反して大きく開く。焼成良好、淡橙褐色を呈する。

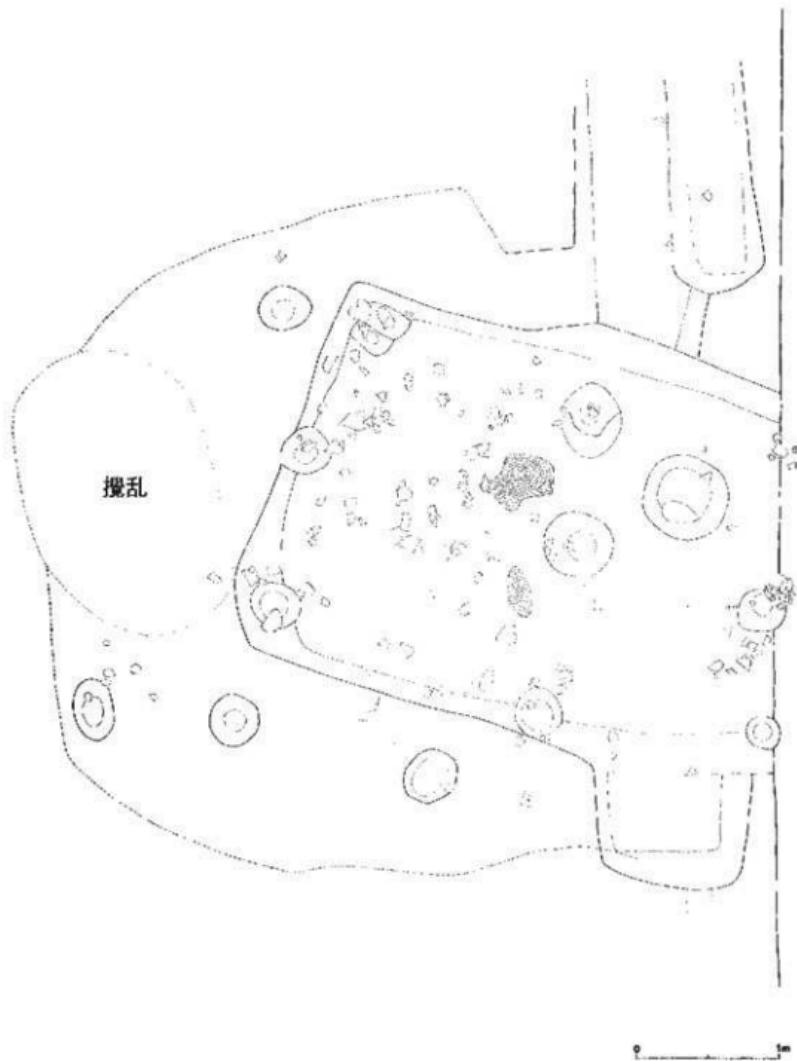
60の土師器環は、推定底径5cm、残存高5.7cm。外面は縦のヘラ削り。かなり小さい底面もヘラ削りで調整されている。内面はほとんど削離している。焼成良好、外面黒褐色、内面橙色を呈する。

68の土師器環は、第6号溝状遺構出土。推定口径12.5cm。残存高2.6cm。口縁部外傾し、口縁部と体部の境は明瞭で、体部は浅い。口唇部上面が平坦にナデられ、体部外面ヘラ削り。焼成良好、淡褐色を呈する。

（3）第1号竪穴遺構（第3図・第16図）

調査区の北側に位置し、第6号溝状遺構などに切られている。全掘はできなかったが、全体の8割程度を調査したものと思われる。

周囲が幅4m程で擂鉢状に竪穴に向って盛んでおり、竪穴部分は幅2.7~3.0m、長さ4m以上の



第15図 第1号竪穴遺構遺物出土状態

長方形を呈する。確認面よりの深さは35~50cm、壁高は25~30cmで、壁はやや斜めに立ち上り、床面は緩やかな起伏がある。

竪穴内の實際には、径25~35cm、確認面よりの深さ45~80cmのピットが並んでおり、竪穴外の捕鉢状に窪んだ部分にも同様のピットが4基検出された。竪穴の中央には、径45×50cm、床面よりの深さ約35cmのピットがあり、その西北側と西南側に、厚さ5cmほどの板状の焼土塊が、床面から5cmほど浮いた状態で検出された。また、中央のピットの東北側には、径60cm、床面よりの深さ約30cmのピットがあり、その底には精選された白色粘土が厚さ約5cmほど貯えられており、その上には長さ約25cmの自然石が置かれていた。

出土遺物は、埴輪片、土師器片、土馬の頭などである。

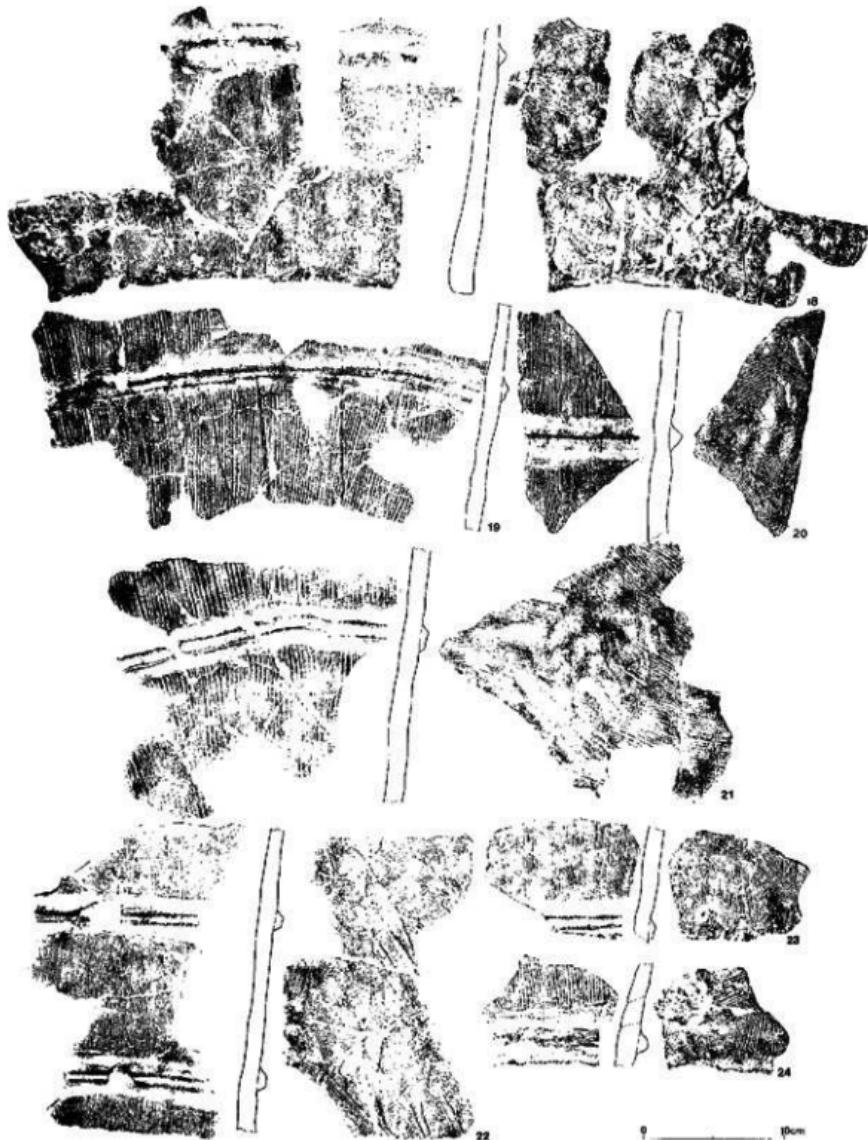
第1号竪穴遺物出土遺物（第17図~第20図）

○ 塩輪片（第17図1~第20図48）

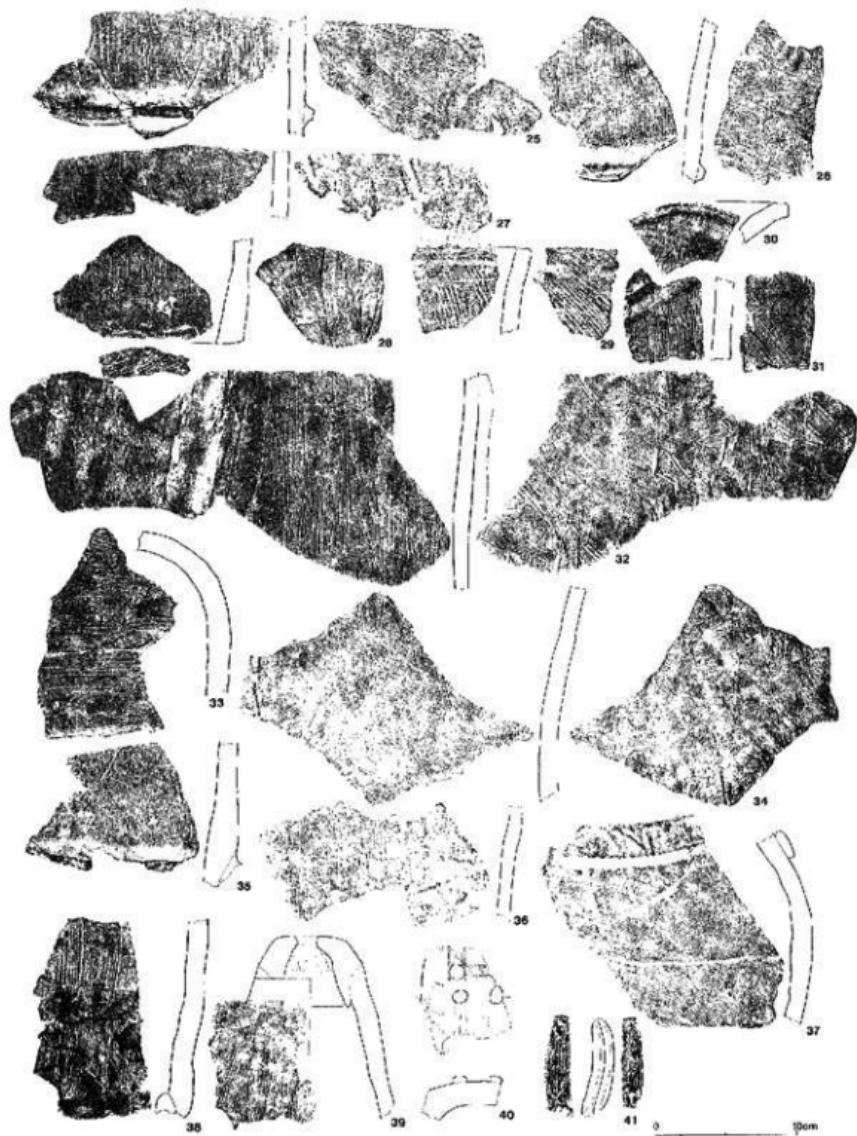
番号	焼成	色調	ハケ目 (1cm)	備考	番号	焼成	色調	ハケ目 (1cm)	備考
1	良好	橙褐色	6本		25	良好	赤褐色	7本	
2	良好	橙褐色	4本		26	良好	橙褐色	8~9本	
3	良好	赤褐色	8~9本	推定口徑20cm	27	良好	赤褐色	7本	
4	良好	淡橙褐色	6~7本		28	良	淡褐色	5~6本	
5	良好	橙褐色	8~9本	ハケ目は浅い	29	良好	淡橙褐色	3~4本	形象埴輪、
6	良	淡褐色	5~6本						部淡灰褐色
7	良好	淡褐色	6~7本	内面黒褐色	30	良好	淡橙褐色	7本	形象、径6cm
8	良	淡褐色	6本		31	良好	橙褐色	7~8本	形象埴輪？
9	良好	橙褐色	7~8本		32	良好	橙褐色	7~8本	形象埴輪
10	良好	赤褐色	6本		33	良好	淡橙褐色	8~9本	馬形埴輪？
11	良好	赤褐色	8~9本		34	良	淡橙褐色	7本	形象埴輪
12	良好	橙褐色	7本		35	良	淡褐色	6~7本	形象埴輪
13	良	赤褐色	7本		36	やや不良	淡橙褐色	7本	形象埴輪？
14	良	淡褐色	2~3本		37	良	淡橙色	7本	馬形埴輪？
15	良好	淡橙褐色	7~8本		38	やや不良	淡褐色	4~5本	形象埴輪？
16	良好	橙褐色	7本		39	良	淡橙褐色	7本	形象埴輪
17	良好	淡橙褐色	7~8本		40	良	淡橙色	3本	人物埴輪？
18	やや不良	赤褐色	8本	表面の剥離激しい	41	良好	淡橙褐色	5本	形象埴輪
					42	良好	赤褐色	7~8本	馬形埴輪
19	良好	暗橙褐色	4本	突帯径15cm	43	良好	淡褐色	—	鈴飾り
20	良好	橙褐色	7本		44	良好	橙褐色	—	下げ豆良
21	良好	暗赤褐色	4~5本	突帯重む	45	良好	淡橙褐色	—	下げ豆良
22	良好	淡橙褐色	7本	一部黒灰褐色	46	良好	橙褐色	4~5本	人物埴輪頭髪
23	良好	赤褐色	8本		47	良好	暗橙褐色	4本6本	人物埴輪腕
24	良好	淡褐色	4本~7~8本	ハケ目2種類	48	良好	赤褐色	7~8本	形象埴輪？



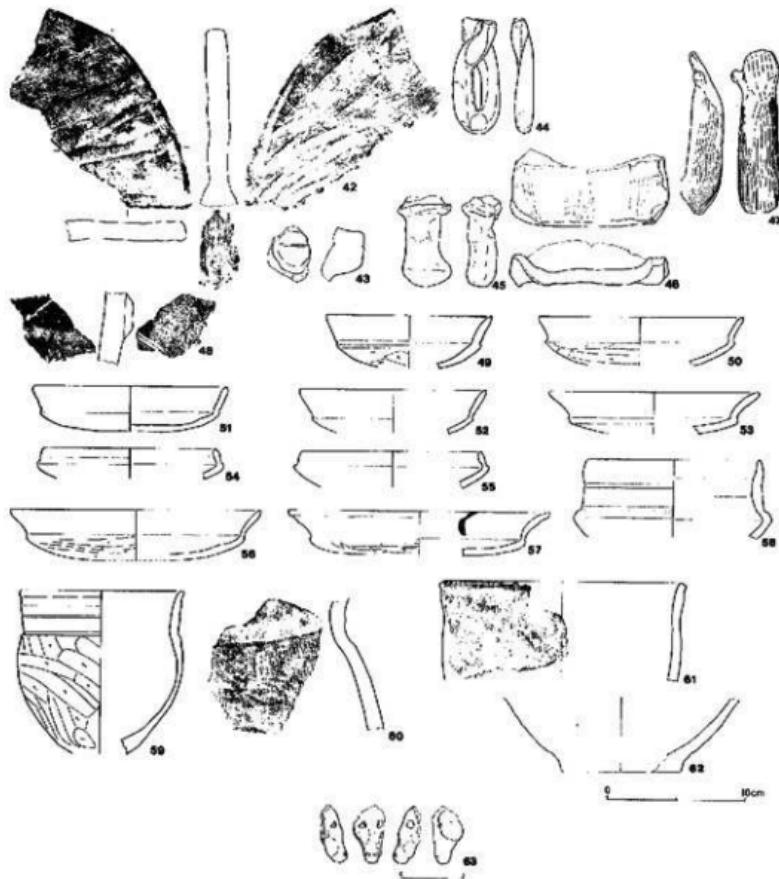
第16图 第1号竖穴道棺出土物(1)



第17図 第1号竪穴遺構出土遺物（2）



第18图 第1号竖穴造構出土物（3）



第19図 第1号竖穴遺構出土遺物（4）

1～9は、円筒埴輪の口縁部である。8はかなり開いた形態を呈するものと思われる。

10～26は、突帯のある破片や、底部などである。10の底面は、指の押圧及びナデによる調整。16の突帯の上には円形の透孔がある。18の底面は丁寧にナデされている。19の拓影は一部は省いたが、突帯はほぼ全周しており、対面に透孔が2つある。22は、上の突帯の上に、四角形に近い形の透孔の一部が認められる。24は、外面左端に透孔がある。24のハケ目には、1cmあたり4本のものと7～8本のものの2種類の棒状工具を使用したことが認められる。28の底面には、1cmあたり4本の浅いハケ目がある。

29～48は、形象埴輪片と考えられるものである。29は、口唇部外面に沈線が2条巡っている。30の内面は指ナデ。31は、突帯が斜めに貼り付けられている。32は、外面のハケ目の上に沈線で鉤齒状の文様が描かれており、縦に平行して2条、鱗状のものが剥離した部分がある。33は、馬形埴輪の背に近い部分と思われ、端部に指ナデが認められる。34は、横方向の湾曲の具合に歪みがある。内面は指ナデ。35は平板な破片で、内面は指ナデ。36は、径は小さくハケ目は浅い。内面は指ナデ。37は、馬形埴輪の一部と思われ、粘土帶が貼り付けられている。粘土帶の上面はハケ目調整の後指ナデ。内面は全面指ナデ。38の内面は指ナデ。39の頂部は嵌め込むようになっており、先端には、穿孔ではなく、粘土成形の際のものと思われる不整形の穴がある。内面は、先端が指の押圧、その下は指ナデ。40は、連続した斜線が加えられた平行沈線とボタン状の貼付があり、赤彩が施されている。41は、粘土紐を貼り合わせて成形されており、先端を欠損、図の下端は剥離面である。表面間にハケ目が認められる。42は馬形埴輪のたてがみと考えられる。左右両面ともハケ目調整の後指ナデ、剥離面には脣部のハケ目のネガが認められる。43の扁平な鈴飾りの剥離面にもハケ目のネガが認められる。44は、粘土紐を捻って作った下げ美豆良。表面の上（重なった部分）と下に剥離面がある。裏面は平坦。45も下げ美豆良の先端で、上部は鈴状となっている。46は、男子埴輪の左右に振り分けた頭髪であろう。基部は丸く湾曲しており、端部はめくれたようになっている。47は、人物埴輪の挙手をした腕である。48は、突带上に沈線が施されている。

○土師器（第20図49～62）

49の土師器環は、推定口径12.0cm、残存高3.4cm。口縁部外傾し、口唇部上面は平坦。口縁部と体部の境の稜は明瞭で、体部外面へラ削り。口縁部外面に彩色の痕跡。焼成良好、淡橙褐色を呈す。

50の土師器環は、推定口径14.8cm、残存高3.5cm。口縁部外傾し、口縁部と体部の境の稜は鋭い。体部外面へラ削り。内面はよく磨かれている。焼成良好、淡褐色を呈する。

51の土師器環は、推定口径14cm強、器高3.2cm。口縁部は少し外傾し、体部は浅い。口縁部と体部の境の稜は丸く、体部外面へラ削り。焼成良好、淡褐色を呈する。

52の土師器環は、推定口径13.5cm強、残存高3.2cm。口縁部は外傾し、口縁部と体部の境の稜は明瞭。体部外面へラ削り。焼成良好、赤褐色を呈する。

53の土師器環は、推定口径15cm強、残存高3.1cm。口縁部は強く外反し、体部は浅い。口縁部と体部の境の稜は平坦。体部外面へラ削り。焼成良好、赤褐色を呈する。

54の土師器環は、推定口径13cm弱、残存高2.3cmで、やや歪んでいる。口縁部内傾し、口縁部と体部の境の稜は丸く、体部外面へラ削り。焼成良好、暗褐色を呈する。

55の土師器環は、推定口径13cm、残存高2.7cm。口縁部内傾し、口縁部と体部の境の稜は明瞭。体部外面へラ削り。焼成良好、赤褐色を呈する。

56の土師器環は、推定口径18cm、残存高3.7cm。口縁部が開いた皿型の器形を呈する。口縁部と体部の境の稜は丸い。体部外面へラ削り。焼成良好、橙褐色を呈する。

57の土師器環は、推定口径19cm、残存高2.8cm。口縁部が開いた皿型の器形を呈する。体部外面へラ削り。口縁部内面に墨のようなものが流れている。調整は丁寧で、焼成良好、淡橙褐色を呈す。

58の土師器壺は、推定口径12.5cm、残存高5.7cm。高い口縁部の中位に沈線が巡り、張り出した後の上にも沈線が巡る。深い体部の外面はヘラ削り。焼成良好、淡褐色を呈する。

59の土師器壺は、推定口径12cm、残存高12cm。わずかに外傾する口縁部の外面に沈線が2条巡り、口唇部は少し外反。体部外面ヘラ削り、内面は丁寧な横ナデ。焼成良好、橙褐色を呈する。

60は、土師器壺の肩部の破片。外面はハケ目調整の後、頸部横ナデ、胴部縦のヘラ削り。内面はよくナデられている。焼成良好、淡橙褐色～黒褐色を呈する。

61は、小型の瓊又是瓶の破片であろうか。推定口径18cm、残存高7.8cm。頸部はほとんど屈曲せず、口唇部外面に沈線が巡る。外面ハケ目調整、内面は丁寧なナデ。焼成良好、淡褐色を呈する。

62は、土師器壺の底部。推定底径9cm弱、残存高5.5cm。外面及び底面ヘラ削り。内面はヘラナデ。焼成良好、淡橙褐色を呈する。

○土馬（第20図63）

土馬の顔面である。残存長2.8cm、残存幅1.5cm。頬から鼻先にかけてをつまんで作り出しており、額の両脇は裏へ折り曲げたようになっている。目と鼻孔は刺突で、左目は貫通している。焼成良好、淡褐色を呈する。

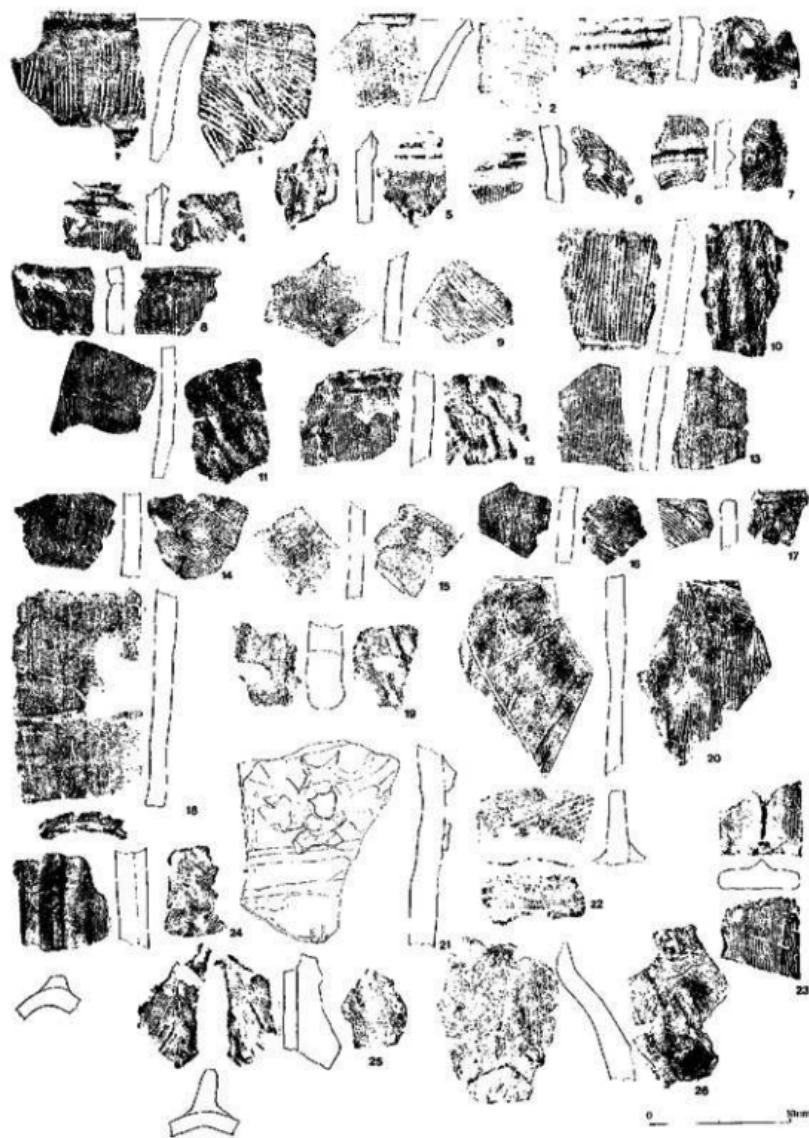
昭和53年の第2次発掘調査の際に出土したものよりも小型だがリアルであり、形態的には平城京で出土しているものに類似している。

（3）表面採集遺物（第21図1～26）

○埴輪片（第21図1～26）

番号	焼成	色調	ハケ目 (1cm)	備考	番号	焼成	色調	ハケ目 (1cm)	備考
1	良	淡褐色	4本	穴帶多く剥離	14	良	暗褐色	10本	
2	良好	暗褐色	3本		15	良	灰褐色	8本	半須恵質
3	良好	棕褐色	4本？	内面指ナデ	16	良好	淡赤褐色	7本	外面右端透孔
4	良	淡褐色	5本	内面やや磨滅	17	良好	棕褐色	4～5本	外面指ナデ
5	良好	淡橙褐色	8～9本	内面指ナデ	18	良	淡灰褐色	9本	内底面指ナデ
6	良	棕褐色	5～6本		19	良	淡橙色	7本	底面指ナデ
7	良好	淡赤褐色	6～7本		20	良好	淡赤褐色	5本・9本	物形埴輪
8	良好	淡橙褐色	7本・10本	輪積痕明瞭	21	良	淡橙褐色	6～7本	馬形埴輪？
9	良	淡橙褐色	7～8本		22	良	淡橙褐色	—	馬形埴輪？
10	良	黄褐色	4本	内面指ナデ	23	良好	棕褐色	6本	形象埴輪
11	良	棕褐色	6本	内面指ナデ	24	良	淡橙褐色	7本	形象埴輪
12	良	淡褐色	6本	内面指ナデ	25	良	淡橙褐色	—	形象埴輪
13	良好	暗褐色	7～9本		26	良好	棕褐色	—	形象埴輪

8は、2種類の櫛状工具により調整されている。15は平板な破片で、内面は指ナデ。17は、形象



第20図 表面採集の古墳時代遺物

埴輪かもしれない。11番部上面に細い沈線が2条巡る。20は楕形埴輪の鱗であろう。正面に沈線が施され、側面は平坦。裏面は2種類の梯状工具によるハケ目調整。21は、馬形埴輪の尻懸の鈴飾りの一部であろう。鈴は3ヶ所剝離しており、剝離面の下にもハケ目がある。図の下位には、鞍と思われる剝離面が横位に見られる。22は、馬形埴輪の鞍の一部と思われる。正面には斜めに沈線が施されており、剝離面には胴に施されたハケ目のネガが認められる。23は、粘土板が2枚貼り合わされており、突帯はつまみ出されている。24は、突帯が縦に施されている。25は、堵状の部分をもつ破片である。図の上端は、外面の左側に粘土帶を貼り付け、その下に沈線が施されている。26は、図の上位の径が小さく、内側は剝離している。外面はヘラナデの後指ナデ、内面は指ナデ。

3. 近世の遺構と出土遺物

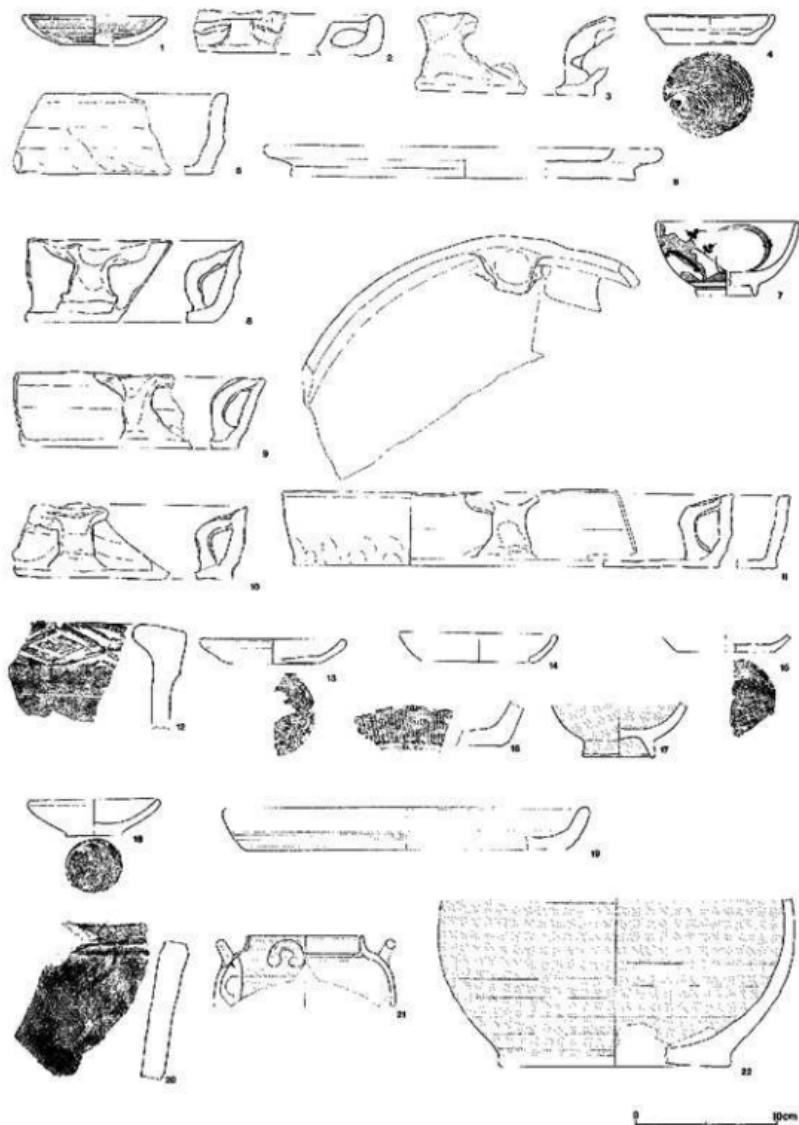
○土塁（第3図）

番号	大きさm	深さcm	備考
1	2.0×1.2	20	椎鉢状、底は平坦。
2	—	40~60	少なくとも土塁5基以上の切り合い。底は凹凸があり、径30~40cmの浅い小ピットがある。焼土塊も検出された。東端に1.6×0.8mほどの東西に長い長方形の墓塚と思われる土塁があった。M 1を切っている。
3	? × 1.2	50	擾乱のため長さ不明。底は平坦。
4	—	20~45	少なくとも土塁3基以上の切り合い。底は緩い凹凸がある。
5	—	20~40	土塁2基以上の切り合い。M 3に切られている。
6	1.6×1.2	40	椎鉢状。
7	—	20~55	少なくとも土塁2基以上の切り合い。底は平坦。
8	—	35	3.2×2.5m程度の大きさと思われ、底は平坦。M 4を切り、P 7、M 5に切られる。
9	2.0×0.6	30	底にはやや凹凸がある。
10	2.4×0.5	35	底は平坦。M 6を切っている。
11	1.7×?	10	底は平坦。一部に擾乱を受けている。

○溝状遺構（第3図）

番号	上幅m	下幅m	深さcm	備考
1	0.7~0.8	0.1~0.2	35~40	南側の壁に稜がある。
2	0.8~1.2	0.2~0.4	30~35	南側の壁は緩く立ち上がる。
3	0.6	0.4	35	
4	1.2~1.8	0.4~1.2	40~110	西端は、底が急激に上がっており、幅も狭くなる。土層断面E-E'のある部分の、壁際にかなり深い部分がある。P 7・8に切られている。
5	?	?	65	P 8を切っている。
6	1.0	0.8	30	P 10に切られている。

※深さの数値は確認面からのもの。



第21図 近世の出土遺物

○近世の出土遺物（第22図1～22）

番号	器種	遺構	口径	底径	高さ	焼成	色調	
1	灯明皿	P 2	10.0	4.8	2.1	堅緻	灰褐色	須恵質。内外面に褐色の鉄釉。内面に重ね焼痕。
2	内耳焰培	P 4	—	—	2.8	良好	淡褐色	体部外下面下位ヘラ削り。
3	内耳焰培	*	—	—	—	良	黑褐色	
4	土師質皿	P 5	9.0	6.0	1.9	良	橙褐色	底面回転糸切り。
5	焰培	P 7	—	—	5.6	良好	黑褐色	外面ヘラ状工具による調整。外表面炭化物付着。
6	瓦質皿	P 8	28.0	24.0	2.2	良好	黑褐色	粘土板を貼り合わせて成形。
7	染付茶碗	*	10.0	4.2	5.3	堅緻	淡青灰白	典須の發色は淡青灰色でやや不鮮明。40%残存。
8	内耳焰培	M 2	34.0	30.0	5.8	良好	黑褐色	外表面下位ヘラ状工具の横削り。外表面炭化物付着。
9	内耳焰培	*	30.5	28.5	5.0	良好	黑褐色	外表面下位指の押圧とナデによる調整。
10	内耳焰培	M 4	—	—	5.2	良好	黑褐色	外表面下位指の押圧とナデ。外表面炭化物付着。
11	内耳焰培	*	32.0	30.0	5.3	良好	黑褐色	外表面下位指の押圧とナデ。外表面炭化物付着。
12	火鉢？	*	—	—	—	良好	棕褐色	上師質の手焼きか。口縁部外側に沈線文様。底面回転糸切り。
13	土師質皿	M 5	10.5	6.0	1.8	良	灰褐色	口縁部に油煙状の物質付着。
14	土師質皿	*	11.0	8.0	2.1	良好	淡褐色	底面回転糸切り。
15	土師質皿	*	—	6.5	1.3	良好	棕褐色	手焼きであろう。外表面に叩き目状の文様あり。
16	瓦質火鉢	*	—	—	3.2	良好	黑灰色	疊付を除き灰釉が施され、細かい實人あり。
17	灰釉茶碗	*	—	5.0	4.0	堅緻	黄白色	底面回転糸切り。
18	土師質皿	表採	9.0	4.0	2.4	良好	淡橙色	外表面下位ヘラ状工具の横削り。
19	焰培	*	26.0	22.5	3.0	良好	淡褐色	外表面に櫛状工具による文様。内面の調整組合。
20	土師質鉢	*	—	—	—	良好	棕褐色	外表面に灰釉。白土が円形に塗られ、その上に墨絵が描かれていたようである。
21	耳付小壺	*	8.0	—	5.0	堅緻	黄白色	底面を除き灰釉。内面に重ね焼痕あり。
22	鉢？	*	—	17.0	12.0	堅緻	黄白色	

※数値は、4と18を除き、いずれも推定値又は残存値。焰培類の底面はほとんど調整されていない。

V. まとめにかえて

今回の発掘調査で検出された遺構のうち、古墳時代のものは第1号竪穴遺構1基のみである。出土遺物から、6世紀末～7世紀初頭頃、埴輪製作期の末期の遺構と考えられる。この調査結果からは、決め手には欠けるが、埴輪製作工房跡的な性格が考えられる。

第1号竪穴遺構から出土した土馬の顔面も注目されよう。土馬は、昭和53年度の第2次発掘調査でも出土しているが、今回出土したものは、製作の方法は類似しているが、形態はかなり異なっている。

なお、第8号土壙、第4号溝状遺構からは、近世の遺物とともに埴輪片が多く出土しており、古墳時代の遺構を破壊して構築されたことが考えられる。

写 真 図 版

図版 1



1. 調査区全景（1）南側（北より）



2. 調査区全景（2）北側（北西より）

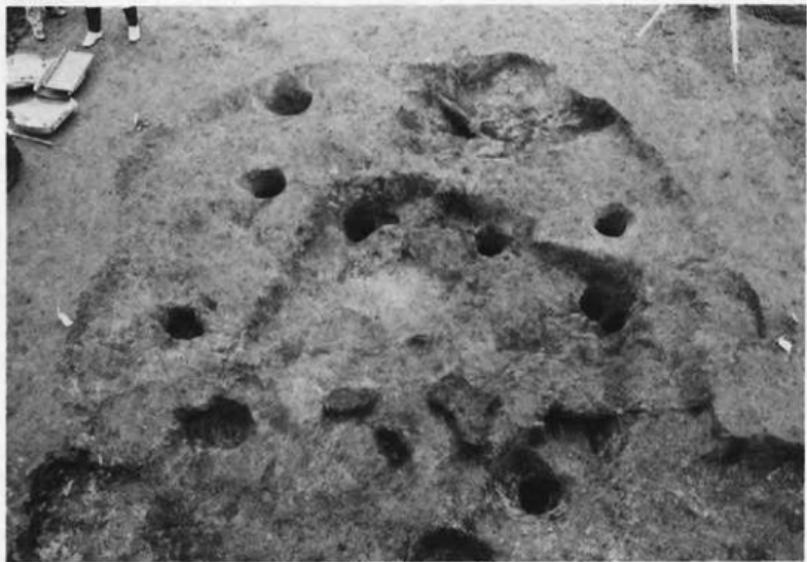


3. 調査風景



4. 第 4 号溝状遺構

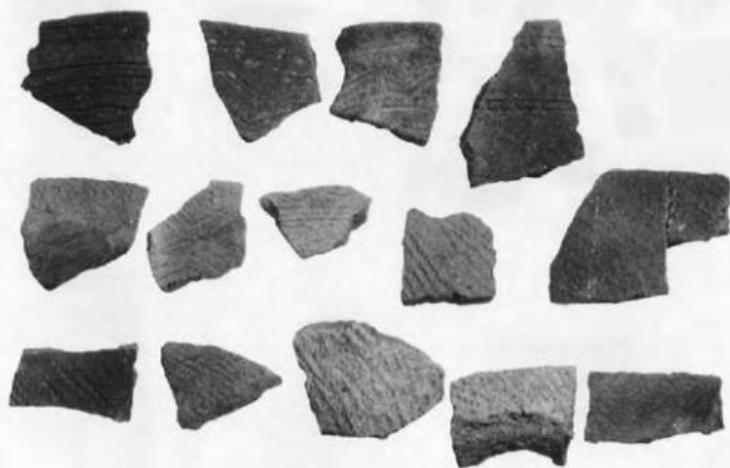
図版 3



5. 第1号堅穴遺構



6. 第1号堅穴遺構遺物出土状態



7. 縄文土器



8. 土馬

図版 5



9. 古墳時代の出土遺物（1）土埴



10. 古墳時代の出土遺物（2）溝状造構

図版 7



11. 古墳時代の出土遺物（3）堅穴遺構



12. 近世の出土遺物

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

割山遺跡（第5次）

印刷 昭和61年3月21日

発行 昭和61年3月31日

発行 深谷市教育委員会

印刷 博文社

正誤表

ページ	部分	誤	正
序	13行目	巻振	巻展
P 5	スケール	0 - 10 cm	0 - 4 m
P 14	14行目	脚てあさう	脚てあさう